教　育　研　究　業　績

氏名　沢宮容子
学位：博士（心理学）

研究分野	研究内容のキーワード
心理学	臨床心理学　カウンセリング心理学

主要担当授業科目	公認心理師の職責、心理学文献講読A・B、臨床心理学セミナー、臨床心理学特論Ⅱ、心理実践実習Ⅰ、臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習Ⅲ）、臨床心理実習Ⅱ

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		特記事項なし。
2　作成した教科書，教材	平成30年11月	『日常診療に役立つ行動医学・心身医学アプローチ』（吉内一浩（編著）医歯薬出版株式会社　2018年発行）において、患者の行動変容に役立つ理論・技法８「動機づけ面接」（pp.64～72）を執筆。「臨床心理学特講」等の授業で教材として用いた。
	平成31年3月	『公認心理師技法ガイド』（下山晴彦他（編著）文光堂 2019年発行）において、「セルフモニタリング」（pp.394～398）、「認知再構成法」（pp.399～404）を執筆。「臨床心理学概論」等の授業で教材として用いた。
	令和5年3月	『臨床心理学と心の健康』（金沢吉展・沢宮容子（編著）東京大学出版会　2023年発行）において、本書全体の編集を担うとともに、第Ⅰ部臨床心理学の社会的役割第2章「心理職の社会的役割」（pp.17～24）を執筆した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成27年4月	筑波大学人間系優秀教員賞受賞。
	令和5年3月	筑波大学人間系優秀教員賞受賞。
4　実務の経験を有する者についての特記事項	平成25年4月～令和5年3月	筑波大学心理相談室室長として心理相談室の運営・管理に携わり、地域社会にも寄与した。
	平成25年4月～現在	心理専門職を含む一般市民を対象とした講演会・研修会、筑波大学キャリア・プロフェッショナル養成講座等の講師を務めている。

5　その他	平成 21 年 4 月～現在	独立行政法人大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員（令和 4 年 1 月より心理学部会主査）として、学位審査を行っている。
	平成 23 年 8 月～平成 25 年 7 月	独立行政法人日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員、及び国際事業委員会書面審査員として、特別研究員等の審査を行った。
	平成 26 年 5 月～令和 5 年 4 月	独立行政法人大学改革支援・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員として、認証評価を行った。
	平成 26 年 12 月～令和 2 年 11 月	独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員（臨床心理学）として、研究費配分のための審査を行った。
	平成 28 年 1 月～令和 3 年 3 月	独立行政法人大学改革支援・学位授与機構国立大学教育研究評価委員会専門委員として、国立大学の教育研究評価を行った。
	平成 30 年 2 月～現在	国家試験公認心理師試験委員を務めている。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許	平成 12 年 4 月	財団法人日本臨床心理士資格認定協会臨床心理士。
2　特許等		特記事項なし。
3　実務の経験を有する者についての特記事項		特記事項なし。
4　その他	平成 21 年 8 月	日本カウンセリング学会独創研究－内山喜久雄記念賞受賞。
	令和 3 年 8 月	日本応用心理学会学会賞受賞。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） （平成 20 年以降） 1. 教師のための学校カウンセリング	共	平成 20 年 8 月	有斐閣 （344 ページ）	本書は，学校で行うカウンセリングの中でも，教師が行うカウンセリングに特化して解説したものである。これから教職に就く学生が，教育現場でカウンセリングの即戦力となるための素養やスキルをいかに育てるかを解いたものである。担当箇所においては，子どもたちの進路選択や人生設計をサポートするためのキャリア教育について解説した。具体的には，キャリア教育が求められるようになった背景とその内容，キャリア教育と進路指導の違いなど，主にキャリア教育の基礎的知識を記した。 担当箇所：第Ⅱ部第 9 章第 1 節「なぜキャリア教育が必要なのか」（pp. 156～157），第 2 節「キャリア教育とは」（pp. 158～160） 編著者：小林正幸，橋本創一，松尾直博
2. 認知行動療法の技法と臨床	共	平成 20 年 10 月	日本評論社 （323 ページ）	本書は，認知行動療法の発想と実践について体系的に学　ぶことができる標準的なテキストブックである。「第 1 部 総論」「第 2 部 治療モジュールと技法」「第 3 部 臨床」「第 4 部 関連領域との連携」から成る。担当した第 2 部第 11 章「アサーショントレーニング」においては，アサーショントレーニングの定義，主要研究，具体的手続き，効用と限界，実施上の留意点について論じた。 担当箇所：第 2 部第 11 章「アサーショントレーニング」（pp. 93～99） 編著者：内山喜久雄，坂野雄二
3. ヒューマンサービスに関わる人のための改訂教育心理学	共	平成 21 年 4 月	文化書房博文社 （221 ページ）	本書は，ヒューマンサービスに関わる人のためのシリーズ書である『教育心理学』の改訂版である。第 1 講の「教育心理学とは何か」から第 27 講の「モンスターペアレント」まで，教育心理学における最小限の必修事項と複雑化する学校現場に対応するための最新知識がバランスよく記述されている。担当箇所「非行」においては，非行の定義，最近の非行の特徴，非行少年と関わる際のポイントについて解説した。また，「カウンセリング」においては，

				カウンセリングの定義，カウンセラーの条件，カウンセリングの技法を概説した上で，ヒューマンサービスに生かす観点からカウンセリングを論じた。 担当箇所：第 19 講「非行」（pp. 150～155），第 21 講「カウンセリング」（pp. 164～172）， 編著者：徳田克己，水野智美，高見令英
4. ヒューマンサービスに関わる人のための改訂人間関係学	共	平成 22 年 4 月	文化書房博文社 （198 ページ）	本書は，ヒューマンサービスを内容とする専門職の養成段階や現職者の研修等で使用できるテキストとして，社会心理学における対人関係やコミュニケーション関係の知見を紹介したものである。「第 1 章 よりよい人間関係を作る」から「第 11 章 福祉施設における人間関係」まで全 11 章から構成される。担当箇所では，「人間関係の病理」をテーマに，対人恐怖や引きこもりのような人間関係の病から人間関係を改善する方法まで解説した。 担当箇所：第 2 章「人間関係の病理」（pp. 29～47） 編著者：徳田克己
5. クライエントの問題を解決する面接技法	共	平成 22 年 6 月	ぎょうせい （204 ページ）	本書は，最新の面接技法を紹介したものである。「第 1 章 基本的技法の現在」「第 2 章 行動理論を基礎とした最新の技法」「第 3 章 理論と共に発展する面接技法」「第 4 章 最新のカウンセリング現場の新たな展開」から成る。担当した第 2 章第 1 節では，クライエントの問題を解決する面接技法の一つである「認知変容の技法」について概説した。同技法は，人はそれぞれ出来事について異なった受け取り方をすることを前提に，受け取り方や考え方（認知）を変容させることでクライエントが抱える問題の解決を図る技法である。 担当箇所：第 2 章第 1 節「行動理論を基礎とした最新の技法：認知変容の技法」（pp. 48～57） 編著者：楡木満生
6. REBT カウンセリング「感情の問題解決」を指向して	共	平成 22 年 9 月	ぎょうせい （204 ページ）	本書は，エリスにより創始された REBT カウンセリングが我が国に与えた影響から解き起こし，未来への展望まで論述を尽くした REBT カウンセリングの解説書である。「第 1 章 REBT の基礎」「第 2 章 REBT の応用」「第 3 章 REBT の展開分野」「第 4 章 REBT と隣接諸理論」から成る。担当した第 4 章第 2 節では，論理療法と認知療法といった心理療法

				が自然なかたちで融合して生まれた「認知行動療法」の基本的モデルや特質を中心に解説した。認知行動療法とは，人間の認知，行動，情動，生理の各側面に多面的な働きかけを行うことにより，それぞれの変容を促し，治療効果を引き出す治療方法である。 担当箇所：第 4 章第 2 節「認知行動療法」（pp. 183～191） 編著者：菅沼憲治
7. 認知行動療法の理論と臨床	共	平成 22 年 11 月	ぎょうせい（180 ページ）	本書は，認知行動療法の理論について解説するとともに医療，教育，産業の各領域における具体的かつ実践的な臨床ケースを中心に具体的な方法論について詳述したものである。担当箇所においては，認知行動療法の理論の解説，及び引っ込み思案幼児への社会的スキル訓練など教育領域における認知行動療法の適用を中心に論じた。 担当箇所：第 1 章第 1 節「認知行動療法とは」（pp. 12～17），第 2 節「ケースフォーミュレーションの目的と効用」（pp. 18～21），第 3 節「認知行動療法におけるケースフォーミュレーション」（pp. 22～25），第 4 節「認知行動療法の各種介入技法」（pp. 26～38），第 3 章第 1 節「引っ込み思案幼児への社会的スキル訓練」（pp. 92～105），第 2 節「チック症状を示す児童の母親に対する論理情動行動療法（REBT）の適用」（pp. 106～116），第 3 節「友人関係に不安を感じる女子生徒に対する認知の再構成」（pp. 117～126）。 編著者：内山喜久雄，沢宮容子，中井貴美子
8. 実践グループカウンセリング	共	平成 22 年 11 月	金子書房（239 ページ）	本書は学校現場の教師を対象に，子どもが育ち合う集団づくりや対人関係ゲームを中核としたグループカウンセリングの方法や活用を解説したものである。担当箇所においては，普段は何の問題もなく話すことができるのに，ある状況に置かれると，途端に口をつぐんで話さなくなってしまう子，すなわち「選択性緘黙」に焦点を当てた。特に，「選択性緘黙」に対する援助における留意点，なぜ対人関係グームが有効なのかについての解説とともに，対人関係ゲームの実践まで，包括的に解説した。 担当箇所：第 2 部第 5 章「選択性緘黙」（pp. 127～136） 編著者：田上不二夫

9. カウンセリング実践ハンドブック	共	平成23年1月	丸善 （766ページ）	本書は，カウンセラーを志している人，カウンセリングについてさらに深く知識を求めて実践したい人に向けて書かれたものである。担当箇所では，ものの見方や考え方，行動，情動，生理に関わる問題の解決をはかる援助方法を総称した「認知行動カウンセリング」および「自律訓練法」について解説した。自律訓練法は，不安や緊張に起因する障害の治療などに用いられるが，最近ではストレス解消や疲労回復，リラクゼーションの手段として，さらには学校教育の場における緊張緩和や集中力の養成などにも活用されるようになっている。 担当箇所：第1章第11節「認知行動カウンセリング」（pp. 28～31），第4章第26節「自律訓練法」（pp. 448～449） 編著者：松原達哉【代表】，沢宮容子他【編著】
10. ヒューマンサービスに関わる人のための心の健康学	共	平成23年4月	文化書房博文社 （201ページ）	本書は，第一線で活躍する精神科医，臨床心理士，大学のカウンセラー，看護師などの心の健康の専門家が，将来ヒューマンサービスの仕事に携わる大学生に知ってもらいたい事柄をわかりやすく解説したテキストである。第1章「心の健康学とは何か」から第8章「ストレスとのつきあい方」まで全8章から構成される。担当した7章では，主に人が他人を知り理解する対人認知について，そのプロセスに働くいくつかのルールを紹介するとともに，相手の性格の捉え方の様々な方法や視点について解説した。 担当箇所：第7章「人間関係と心の問題」（pp. 163～182） 編著者：徳田克己，福島洋子
11. カウンセリング心理学ハンドブック［上巻］	共	平成23年5月	金子書房 （331ページ）	本書は，カウンセリングのテキストであり，上巻，下巻，実践編の三冊から成る。上巻は第1章カウンセリング心理学Ⅰおよび第2章カウンセリング心理学Ⅱで構成されており，担当した第2章は，多くのカウンセリング技法を概観しているが，特に論理情動行動療法（REBT）に焦点を当てた。主に，BERTの定義や考え方，ABCモデルやABCDEモデルといった理論を中心に解説した。 担当箇所：第2章第5節「論理情動行動療法（REBT）」（pp. 208～216） 編著者：楡木満生，田上不二夫

12. 楽観的帰属様式の臨床心理学的研究	単	平成 24 年 3 月	風間書房 （268 ページ）	本書は，博士論文を再構成し出版したものである。「第 1 章 楽観性および楽観的帰属様式に関する研究の動向」「第 2 章 楽観的帰属様式尺度の作成」「第 3 章 楽観的帰属様式の性質」「第 4 章 母親の楽観的帰属様式と幼児の社会性との関連」「第 5 章 悲観的帰属様式から楽観的帰属様式への変容」および序章と終章から成る。楽観的帰属様式の尺度を開発するとともに，事例研究を通して悲観的帰属様式から楽観的帰属様式へと変容させる方法の効果を検証した。
13. ここだけは押さえたい学校臨床心理学	共	平成 24 年 4 月	文化書房博文社 （219 ページ）	本書は，教師を志す学生や現場で勤務している教師だけでなく，学校という場に関連するすべてのヒューマンサービスに携わる人々に，学校臨床心理を理解し，その基礎を身につけてもらうことを目指したものである。第 1 講「現在の学校と子どもたち」から第 26 講「心理関連の資格」まで全 26 講で構成される。担当箇所では，無気力をテーマに，無気力な子どもの特徴や原因から，その対応にいたるまで幅広く解説した。 担当箇所：第 11 講「無気力」（pp. 92～101） 編著者：小林朋子・徳田克己
14. 人生哲学感情心理療法入門: アルバート・エリス博士の REBT を学ぶ	共	平成 25 年 4 月	静岡学術出版 （210 ページ）	本書は，日本人生哲学感情心理療法学会の REBT 心理士等の資格試験に向けて，最初の入門コースで活用するテキストである。主に人生哲学感情心理療法（REBT）の人生哲学を学んでもらうことが眼目となっている。第 1 章「人生哲学感情心理療法の基礎」，第 2 章「人生哲学感情心理療法の応用」，第 3 章「人生哲学心理療法の展開」，第 4 章「人生哲学感情心理療法の隣接諸理論」の全 4 章から成る。「認知行動療法」を担当し，認知行動療法とは何か，認知行動療法の基本モデル，特徴などについて解説した。 担当箇所：第 4 章第 2 節「認知行動療法」（pp. 190～196） 編著者：菅沼憲治
15. 心理療法の見立てと介入をつなぐ工夫	共	平成 25 年 8 月	金剛出版 （187 ページ）	本書は，『心理療法がうまくいくための工夫』シリーズの第二弾である。本書では特に，心理療法の習得を目指す者に対して，「見立てと介入のプロセス」の観点から知見を整理した。このような点から本書を構成することで，心理療法の様々な学派を超えた共通性

				と相違性が明らかになる。担当箇所では，認知行動療法における見立てと介入に焦点化した。認知行動療法における見立てに関する考え，具体的な見立てのプロセスといった基礎的理解から，介入の実際といった実践的な活用まで，包括的に説明した。 担当箇所：第 4 章「認知行動療法における見立てと介入をつなぐ工夫」（pp. 61～71） 編著者：乾吉佑
16．看護に活かすカウンセリングⅠ	共	平成 25 年 8 月	ナカニシヤ出版 （157 ページ）	ⅠとⅡの二冊組のⅠにあたる本書は，コミュニケーション・スキルやカウンセリングの理論編と看護場面でそれを活かすことに力点をおいた実践編から構成される。そこでは主に，ケア対象の生き方を尊重した支援を行うためのアプローチとして，カウンセリング技法を活用したコミュニケーション・スキルについて紹介した。担当箇所では，カウンセリングの基本的事項について解説した。取り上げた項目は，カウンセリングの定義，重要な構成概念，カウンセリングにおける基本的な言語コミュニケーション，非言語コミュニケーションについてである。 担当箇所：第 4 章第 1 節「カウンセリングとは」（pp. 23～27） 編著者：伊藤まゆみ
17．クローズアップ学校	共	平成 27 年 9 月	福村出版 （253 ページ）	本書は，現代社会の人の行動と「こころ」を応用心理学の視点から読み解くクローズアップ・シリーズの「学校」である。これから心理学を学ぼうとする高校生や大学生，心理学に興味のある人にとって親しみやすい専門書である。担当箇所では，子どもの抑うつと認知行動療法について解説した。まず，子どものうつ病，抑うつ予防プログラムなど「子どもの抑うつ」に関して説明し，認知行動療法，およびその学校現場における実践事例などに触れながら，包括的に解説した。 担当箇所：トピック 22「子どもの抑うつと認知行動療法：『うつ病』，若者の疾患と障害の最大要因」（pp. 209～215） 編著者：藤田主一・浮谷秀一
18．実践学校カウンセリング 2015	共	平成 27 年 11 月	小学館 （129 ページ）	本書は，学校教師に，カウンセリングに関する最新理論を具体的な事例に即して，学校内の教育活動を援助し，より円滑に進められることを目指し，執

				筆されたものである。担当箇所で扱った事例は，全 44 のうち 3 事例である。キャリアカウンセリング，自己肯定感を高める支援，および自己決定について学校現場の実情に触れながらカウンセリングの具体的方法を解説した。 担当箇所：Ⅴ生き方・キャリア教育の 32「キャリアカウンセリング」（pp. 88～89），34「将来への希望がない」（pp. 92～93），36「自己決定ができない」（pp. 96～97） 編著者：小林正幸
19．看護に活かすカウンセリングⅡ	共	平成 28 年 3 月	ナカニシヤ出版 （143 ページ）	ⅠとⅡの二冊組のⅡにあたる本書は，主に，効果的な患者支援と看護師のメンタルヘルスのための自己調節としての感情マネージメントについて紹介している。担当箇所では，看護師がメンタルを保つために自身で不快な感情を調節する方法として，楽観的な思考（ポジティブシンキング）を身につける支援について説明した。具体的には，人間が身の回りに起こる様々な出来事に関して，その原因をどこに求めるか，どのように受け止めるかによって楽観的になったり，悲観的になったりすることのメカニズムについて解説した。 担当箇所：第 5 章第 6 節「しなやかな楽観性で対処：ポジティブ心理学をメンタルヘルスに活用する」（pp. 123～128） 編著者：伊藤まゆみ
20．ここだけは押さえたい教育心理学	共	平成 28 年 3 月	文化書房博文社 （176 ページ）	本書は，教師を志す学生や現場の教師だけでなく，学校という場に関連するすべてのヒューマンサービスに携わる人々に，教育心理学を理解し，その基礎を身につけてもらうことを目指したものである。教育心理学の基本的な事項（学習や動機づけ，知能と学力，パーソナリティ）にとどまらず，いじめや不登校，ひきこもり，非行や虐待などの問題に対し，どのように指導・援助したら良いかについても理解が深められるよう構成されている。担当箇所では，「非行」や「学校カウンセリング」について解説した。例えば非行では，最近の非行の特徴やその子どもたちと関わる際のポイントについて，また，学校カウンセリングでは，学校カウンセリングの特徴，留意点，技法などを中心に解説した。 担当箇所：第 18 講「非行」（pp. 141～146），第 20 講「学校カウンセリング」

				（pp. 155～162） 編著者：沢宮容子・水野智美・高見令英
21. 看護予防のためのベストケアリング	共	平成 28 年 10 月	メジカルビュー社(207 ページ)	本書は，介護する者（家族や施設）にも，介護される者（高齢者の方々）にも参考となるよう，より健康に，より幸福を実感できる支援について理解を深めてもらうための実用書である。本書は，「高齢者の睡眠と生活リズムを整える意味」，「高齢者の人間関係や交流を阻害する要因と社会的問題」，「高齢者と介護家族のための最新健康増進法と支援システム」の 3 部から成る。担当した第 3 部第 4 章では，主に論理情動行動療法（REBT）・認知行動療法について，その理論と具体的な活用方法について解説した。 担当箇所：第 3 部第 4 章「バランスのとれた考え方に変え健康を増進する方法」（pp. 158～163） 編著者：松田ひとみ・水上勝義・柳久子・岡本紀子
22. 実践学校カウンセリング 2016	共	平成 28 年 10 月	小学館（129 ページ）	本書は，学校カウンセリングの実践研究 48 事例と学校カウンセリングの実践に必要な技法を紹介するとともに，子どもの悩みや問題に対応するためのテクニックを図解している。担当箇所では，キャリア教育に関して，子どもたちが自らの意志と責任で進路を選択する必要性や，成功経験によって自己肯定感を高めることで将来への希望を育む重要性について述べるとともに，教員の関わり方について解説している。 担当箇所：Ⅴ生き方・キャリア教育 34「キャリア・カウンセリング」（pp. 90～91）36「将来への希望がない」（pp. 94～95）38「自己決定できない」（pp. 98～99） 編著者：小林正幸
23. ここだけは押さえたい学校臨床心理学改訂版	共	平成 30 年 9 月	文化書房博文社（242 ページ）	本書は，不登校，いじめ，発達障害など，学校で扱われることが多い対象や，虐待などの社会的背景の問題等について具体的な対応等を，実践に活用できるように，ヒューマンサービスの専門家が分かりやすく説明したものである。担当箇所では，無気力な子どもの特徴や無気力になってしまうか原因を考察した上で，成功体験や原因帰属，モデリング，主体性などに着目し，子どもが無気力から抜け出すための解決策を解説した。

				担当箇所：第 10 講「無気力」（pp. 83～92） 編著者：小林朋子・徳田克己
24. 公認心理師のための説明実践の心理学	共	平成 30 年 11 月	ナカニシヤ出版 （188 ページ）	本書は，エビデンスに基づく研究知見や，研究者自らの説明実践に即して，公認心理師が遂げるべき説明実践とはいかなるものか，説明実践に必要な 4 つの力について解説したものである。担当箇所では，公認心理師の業務の中で説明がどのように機能しているか，そして，保健医療，福祉，教育，司法・犯罪，産業・労働の 5 分野において説明がどのように実践されているかを把握する重要性について解説した。 担当箇所：第 1 部 1 章「公認心理師と説明の力」（pp. 1～4） 編著者：山本博樹
25. 日常診療に役立つ行動医学・心身医学アプローチ（再掲）	共	平成 30 年 11 月	医歯薬出版株式会社（208 ページ）	本書は，「全人的なアプローチ」の基本となる行動医学の理論・技法を解説している。疾患編では，領域ごとに具体的なアプローチ法を紹介し，治療の難しい″心理社会的因子”の関与が疑われる症例への具体的な対処例を豊富に収載している。担当箇所では，動機づけ面接において重要となるチェンジ・トークを紹介し，それを強化するための５つのカウンセリングスキルと 4 つのプロセスから具体的な面接方法について述べるとともに，動機づけ面接の特徴について解説した。 担当箇所：患者の行動変容に役立つ理論・技法８「動機づけ面接」（pp. 64～72） 編著者：吉内一浩
26. 公認心理師技法ガイド（再掲）	共	平成 31 年 3 月	文光堂 （896 ページ）	本書は，公認心理師に解決を求められている様々な分野の心理学的問題の解決に向けて，有効な専門技能を網羅する本邦初のガイドブックである。世界標準の実践心理職に必要な知識と技法が第一線で活躍する臨床家・専門家により体系的に解説されている。担当箇所では，セルフモニタリングと認知再構成法について，それぞれの理論背景や手続き，活用対象，そして活用する際に注意すべき具体的方法について解説した。 担当箇所：3 章 2.B. 5)「セルフモニタリング」（pp. 394～398）/ 6)「認知再構成法」（pp. 399～404） 編著者：下山晴彦・伊藤絵美・黒田美保・鈴木伸一・松田修

27. 教師のための学校カウンセリング［改訂版］	共	令和 3 年 9 月	有斐閣 （351 ページ）	本書は，教職科目「教育相談の理論及び方法」に対応し，教師にできることは何かという視点から，理論から実践までを，具体的にわかりやすく解説している。個別支援だけでなく，学校という集団の中で協働して子どもと学級集団を育むことをめざす，特別支援教育も視野に入れた最新の「学校カウンセリング」入門書となっている。担当箇所では，「キャリア教育報告書」に基づき，キャリア教育が必要される背景を 4 点挙げ，進路指導との違いについて解説した。 担当箇所：第 9 章 1 節「なぜキャリア教育が必要なのか」（pp. 162～163）2 節「キャリア教育とは」（pp. 164～166） 編著者：小林正幸・橋本創一・松尾直博
28. 公認心理師への関係行政論ガイド	共	令和 3 年 11 月	北大路書房 （272 ページ）	本書は，保健医療，福祉，教育，司法・犯罪，産業・労働という心理職の職域ごとに構成されている。それぞれの職域で公認心理師として働く中で職務に関連する法律や制度などを学べる専門的ガイドブックである。担当箇所では，心理支援を行うにあたって，行政や司法その他の組織や，他の専門職とどのような連携を行うかについて，生物―心理―社会モデルを用いて解説するとともに，生涯学習の必要性にも触れている。コラムは，「公認心理師」という名称の使用制限に関するものである。 担当箇所：第 1 章 1.2「公認心理師の心理支援の内容と特徴」，コラム「名称独占資格としての公認心理師」（pp. 12～16） 編著者：下山晴彦・岡田裕子・和田仁孝
29. 臨床心理学と心の健康（再掲）	編著	令和 5 年 3 月	東京大学出版会 （364 ページ）	本書は，東京大学出版会から発刊された「現代の臨床心理学シリーズ」全５巻の中の第５巻である。同シリーズ」は、臨床現場において役立つ心理専門職の知識と技能を、現代臨床心理学の観点から体系的に解説したものであり、本書は、心の健康について、臨床心理学の観点から解説したものである。第 I 部　臨床心理学の社会的役割、第 II 部　心の健康増進と予防、第 III 部　コミュニティへのアプローチ、第 IV 部 文化と心理支援、という 4 部構成となっている。

				担当箇所：本書全体の編集にあたるとともに、第Ⅰ部　臨床心理学の社会的役割第2章「心理職の社会的役割」（pp.17～24）を執筆した。 編著者：金沢吉展・沢宮容子
（学術論文等） （平成20年以降） 1. 衝動性のコントロールに困難を示す小3男児へのソーシャルスキル指導ーー挙手行動に焦点を当ててーー	共	平成20年7月	日本LD学会誌『LD研究』第17巻	本稿は，衝動性コントロールに困難を示す小学校3年生の男児を対象に，指導時の挙手行動を衝動性の指標とし，不適切な挙手行動を減らすことを目的としたソーシャルスキルトレーニングの実施とその効果を検証したものである。全12回のソーシャルスキルトレーニングの結果として，療育機関の指導場面において対象児の不適切な挙手行動が減少し，適切な挙手行動が増加したことが確認された。（pp.181～190） 共著者：岡部良太，奥野誠一，染木史緒，芳川玲子，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
2. 気晴らし型反応スタイルと対処方略との関連	共	平成20年9月	日本産業カウンセリング学会誌『産業カウンセリング研究』第11巻	本研究は大学生464名を対象に，気晴らしと対処方略の関連を検討したものである。反応スタイル尺度とTAC-24を実施した結果，否定的考え込み型反応スタイル得点の高さと回避的方略得点の高さに関連があること，分析的考え込み反応スタイル得点の高さと「気晴らし」以外の回避的方略得点の低さに関連があることを含む4点が明らかになった。つまり，気晴らし型反応スタイルは，問題解決的な対処方略と組み合わせることで適応的な作用を持つことが明らかになった。（pp.32～38） 共著者：大工原美香，奥野誠一，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
3. 認知行動療法による悲観的帰属様式の変容	共	平成20年12月	日本カウンセリング学会誌『カウンセリング研究』第41巻	本論文では，「帰属様式としての楽観性」という概念を導入した上で，女子学生に認知行動療法を適用し，当該学生の悲観的帰属様式の変容の有効性について検討した。大学生4年生のクライエントAに対して，7カ月間にわたる10回のセッションを行った結果，悲観的帰属様式は変容し，自尊感情，充実感ともに高くなり，抑うつ性，相対的不安度はともに低くなったことが確認された。（pp.346～355） 共著者：沢宮容子，田上不二夫（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）

4. 楽観的帰属様式がネガティブな側面への注目と抑うつ傾向に及ぼす影響	単	平成21年3月	日本応用心理学会誌『応用心理学研究』第34巻	本研究では，楽観的帰属様式が，ネガティブな側面への注目と抑うつ傾向に及ぼす影響について検討した。ここでの楽観的帰属様式とは，ポジティブな出来事を永続的，全体的，内的な原因に，ネガティブな出来事を一時的に，特異的に，外的な原因に帰属させる様式である。大学生97名を対象に，楽観的帰属様式尺度とフェースシートを実施し分析した結果，楽観的帰属様式が低いほど，ネガティブ自由記述が多いこと，ネガティブな側面への注目の度合いが高い者は抑うつ傾向に陥りやすいこと，などが明らかになった。（pp. 180～181）
5. 大学生のアサーションがライフイベントの体験に及ぼす影響	共	平成21年6月	日本カウンセリング学会誌『カウンセリング研究』第42巻	本研究では，大学生461名を対象に質問紙による調査を通して，自分の感情や考えを主張すべき時に相手の立場を尊重しつつ，その場にふさわしい方法で率直にそれを表現するアサーションが，ライフイベントの体験に及ぼす影響を検討した。その結果，アサーション行動である「関係形成」や「説得交渉」は対人的なライフイベントにおいて，ネガティブな影響を与えないことが明らかになった。また，これらの行動は，日常の対人関係においてポジティブな影響を与えることも明らかになった。（pp. 118～124） 共著者：西田恵里子，奥野誠一，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
6. 男子青年における痩身願望についての研究	共	平成21年9月	日本教育心理学会誌『教育心理学研究』第57巻	本研究では，現代において男性社会にも広がる痩身願望の存在に注目し，青年期男子224名を対象に質問紙調査を実施し，痩身願望が規定される心理的メカニズムのモデルを検討した。その結果，痩身願望は，痩せれば自分に自信がもてるといった「自己視点からの痩身のメリット」が直接影響することが明らかになった。また，痩身願望のルートとして，自己顕示欲求から発する痩身願望，自己不満感や不安感から発する痩身願望，自分の意識する肥満度から発する痩身願望の3つを見出した。（pp. 263～273） 共著者：浦上涼子，小島弥生，沢宮容子，坂野雄二（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
7. 不合理的信念と自己意識	共	平成22年3	日本産業カウ	本研究では，認知的要因として位置づ

が主張行動に及ぼす影響		月	ンセリング学会誌『産業カウンセリング研究』第 12 巻	けられた不合理的信念と自己意識が主張行動に及ぼす影響を検討した。質問紙調査の有効回答者合計 486 名を対象とした重回帰分析の結果，問題回避や依存，協調主義の信念，あるいは公的自己意識が主張行動を抑え，倫理的非難の信念や私的自己意識が主張行動を促すことが明らかになった。（pp. 1～10） 共著者：海部紀行，沢宮容子，楡木満生，井田政則（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
8. 不眠を訴える女性への認知行動療法の適用	共	平成 22 年 12 月	日本カウンセリング学会誌『カウンセリング研究』第 43 巻	本研究では，不眠を訴える 33 歳の女性に認知行動療法を適用し，その有効性を検討した。初回面接によって得られた情報をもとに，睡眠衛生指導，睡眠スケジュール法，リラクゼーション法，認知再構成法などの援助指針を立てた。その結果，女性の不眠の訴えは解消されたことが確認された。（pp. 287～295） 共著者：沢宮容子，田上不二夫（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
9. 青年期の友人関係における『自己表明』と『他者表明を望む気持ち』がライフイベントにおよぼす影響	共	平成 22 年 12 月	日本心理臨床学会誌『心理臨床学研究』第 28 巻	本研究では，大学生 461 名を対象に質問紙調査を通して，青年期の友人関係における「自己表明」と「他者表明を望む気持ち」が，ネガティブライフイベント及びポジティブライフイベントにどのような影響を与えるのかを検討した。主な成果として，自己表明・他者表明を望む気持ちは，対人関係上のポジティブな出来事を数多く経験する資質へと通じることが明らかになった。（pp. 687～692） 共著者：西田恵理子，奥野誠一，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
10. 楽観的帰属様式と自己の性格特性評価との関連	単	平成 24 年 11 月	日本応用心理学会誌『応用心理学研究』第 38 巻	本研究では，大学生 537 名を対象に質問紙調査を通して，楽観的帰属様式をもつ者が自己の性格特性をどのように評価しているかを明らかにすることを目的とした。その結果，楽観性の高い者と低い者との認知の違いは，ネガティブな側面において顕著であり，帰属様式を変容する場合にも，ポジティブな側面はあまり変化せず，ネガティブな側面が変化する可能性の高いことが明らかになった。（pp. 149～150）
11. 青年期女子の身体可変性への認知と身体満足感との関	共	平成 25 年 1 月	埼玉工業大学『埼玉工業大	本研究では，個々の身体部位の可変性に対する青年期女子の認知について段

連			学人間社会学部紀要』第12号	階評価を用いて測定し，身体部位間の可変性に対する認知には大村らの結果から導き出されるような差異が存在するかどうかを確認することを第一の目的とした。質問紙調査の分析により，「髪」「肌」「シルエット」「目」「鼻口」など大村らの結果と類似する結果となった。それに伴って，個々の身体部位への可変性に対する認知と満足との間にどのような関連がみられるかを明らかにした。相関分析の結果，同じ身体部位の満足感と可変性に対する認知との間に有意な正の相関関係がみられたのは，「肌」「髪」「鼻口」の3部位のみであった。（pp.35～40） 共著者：大村美菜子，小島弥生，中田洋二郎，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
12. シャイネスと自己愛傾向が心理的well-beingに及ぼす影響	共	平成25年3月	山形大学教職研究総合センター『山形大学心理教育相談室紀要』11巻	本研究では，シャイネスト自己愛傾向との関連を明らかにするとともに，シャイネスと自己愛傾向が心理的well-beingに及ぼす影響について検討した。大学生552名を対象としてシャイネス尺度，自己愛傾向尺度，心理的well-being尺度の質問紙を実施した結果，概ねシャイネスと自己愛傾向には有意な負の関連が認められた。また，シャイネスの各々の下位尺度と自己愛傾向の「注目・賞賛欲求」との間には多くの共通する傾向がみられた。結果の分析により，個人のシャイネスの状態を把握し，効果的なシャイネスの介入を行うためには，自己愛傾向の「注目・賞賛欲求」にも焦点を当てることが重要であることが示唆された。 （pp.21～26） 共著者：栄藤典子，奥野誠一，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
13. 考え込み型反応スタイルと問題解決能力との関連	共	平成25年3月	山形大学教職研究総合センター『山形大学心理教育相談室紀要』11巻	本研究では，否定的考え込み型反応スタイル，分析的考え込み型反応スタイル，問題解決能力及び主観的well-beingの関連を検討した。大学生190名を対象にした質問紙調査の分析により，それぞれの考え込み型反応スタイルは適応的な働きとも不適応的な働きとも関連があることが示唆された。また，考え込み型反応スタイルには，効果的な問題解決を促進する働きがあり，特に，否定的に考え込み傾向が低く，分析的に考え込む傾向が高いものは，問題解決能力と人生満足感が

				高くなることが示唆された。（pp. 27～34） 共著者：岡本翔平，奥野誠一，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
14. うつ状態に対する認知行動療法	単	平成25年6月	更年期と加齢のヘルスケア学会誌『更年期と加齢のヘルスケア』12巻	認知行動療法とは，人間の認知，行動，情動，生理に関わる問題の解決をはかる治療方法のことである。このような各側面に多面的な働きかけを行うことにより，それぞれの変容を促し，治療効果を引き出すことに特徴がある。うつ病に対する認知行動療法の研究で，その効果についてのエビデンスを蓄積してきたが，うつ病以外でも，その適用範囲は広がりを見せている。近年は，科学的根拠に基づくエビデンスベーストの心理療法として，評価を高めつつある。（pp. 133～135）
15. 男女青年における痩身理想の内在化と痩身願望との関係についての検討	共	平成25年6月	日本教育心理学会誌『教育心理学研究』61巻	痩身理想の内在化とは，社会的に魅力がある価値があるとされる痩身を，自己の価値観や理想として取り込んでしまう概念である。本研究の目的は，この痩身理想の内在化と痩身願望との関係について検討することである。男女学生585名を対象に質問紙調査を実施し，現在の体重（体型）を下回る体重が魅力的だとする336名について分析を行った結果，男女ともに個人特性は痩身理想の内在化を媒介することで，痩身願望とより強い関連が認められた。（pp. 146～157） 共著者：浦上涼子，小島弥生，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
16. 児童の抑うつに及ぼすREBT心理教育の効果の検討	単	平成25年8月	日本人生哲学感情心理学会誌『REBT研究』第3巻	本研究では，EllisのABC理論に基づいたREBT心理教育を実施することが，児童の抑うつにいかなる効果を及ぼすかを検討した。小学5年生70名を対象に，全3回のREBT心理教育を実施した結果，REBT心理教育を受けた児童は実施後，明らかに抑うつの低減が認められた。これにより，児童を対象とするREBT心理教育は，抑うつの低減効果をもつ可能性が示唆された。（pp. 67～75）
17. セルフトークが運動パフォーマンスに及ぼす影響	共	平成25年9月	日本スポーツ心理学会誌『スポーツ心理学研究』第40巻	本研究の目的は，中学生と高校生を合わせた24人を対象に，水泳のパフォーマンス向上におけるST（Self-Talk）の効果を検討することであった。その結果，STの使用が良いパフォーマンスに影響を与えることが示唆された。なお，

				ST の効果をもたらす要因として，実験参加者が初めて体験する課題の方が，十分にやり慣れた課題よりも効果が現れやすいことが示されていることからも，取り組む課題や求めるパフォーマンスの水準によっては効果がみられない可能性も考えられる。(pp. 153～163) 共著者：有富公教，外山美樹，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
18. 気晴らし型反応スタイルと精神的健康との関連	共	平成 25 年 12 月	日本カウンセリング学会誌『カウンセリング研究』第 46 巻	本研究では，気晴らしの概念に注目し，気晴らし型反応スタイルと精神的健康との関連を検討した。 大学生 464 名を対象に反応スタイル尺度，主観的健康感尺度，および抑うつ尺度を実施した結果，気晴らし型反応スタイルは精神的健康のネガティブ尺度と弱い負の関連，ポジティブ尺度と弱い正の関連があることなどが明らかになった。これらの結果により，気晴らし型反応スタイルが精神的健康に関連する可能性が示唆された。（pp. 138～147） 共著者：大工原美香，奥野誠一，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
19. 大学生における身体の可変性についての基礎的研究	共	平成 26 年 1 月	立正大学『立正大学心理学研究年報』5 巻	本研究では，身体を「顔の造り」「目」「髪」「肌」「上半身」「下半身」の 6 部位に分け，それぞれの部位についてどの程度，可変性があると感じているかを検討し，女子大生の身体満足度に関する研究のための基礎的な資料を得ることを目的とした。分散分析を行った結果，「髪」について最も変えやすいと感じていることが明らかとなった。ヘアスタイルチェンジに関する記述を見るとパーマやカラーリングで満足できる状態に達しやすく，さらにウィックなどを活用している風潮が近年見られることから，変えることが可能な身体部位であると考えられる。 （pp. 89～93） 共著者：大村美菜子，小島弥生，中田洋二郎，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
20. Gender Differences in the Cognition about the Changeability of Body	共	平成 26 年 11 月	Sociology Study , vol.4	本研究では，身体の可変性に関する認知の性差を検討した。具体的には，身体を「目」「髪」「上半身」「下半身」「顔の造り」「肌」の 6 部位に分け，それぞれの部位についてどの程度，可変性があると感じているかを男子学生と女子学生で比較検討した。その結果，

				男女共に「髪」に対する可変性が高く，「顔の作り」は可変性が低いと認知した。一方で，「目」に対する可変性は男女によって異なり，女性は可変性が高く，男子は可変性が低いと認知した。（pp. 538～543） 共著者：大村美菜子，小島弥生，中田洋二郎，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
21．アルコール依存症からの回復支援	共	平成 27 年 1 月	金剛出版『臨床心理学』第 15 巻	本稿では，医療・保健領域で働く心理職に向けて，アルコール依存症患者に対する回復支援について解説した。アルコール依存症に対する基礎的な背景知識はもちろん，実践的な援助についても触れた。医療・保健領域の心理職は，患者を理解し，スクリーニングし，アルコール依存症の早期発見・早期援助をしていく能力が求められる。ここではアルコール依存症の治療に専門的に携わっていない心理職でも理解可能な SBRT（エスバート）という技法や患者を受診へと動機づける面接などについて詳しく解説した。（pp. 64～70） 共著者：小松知己，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
22. Development of Emotional Intelligence through Stress Experiences: The Role of Dichotomous Thinking	共	平成 27 年 2 月	Journal of Health Science, Vol.5	本研究の目的は，ストレスの多い経験によってもたらされる情動知能の発達における二文法的思考の役割を検討することである。二文法的思考とは，白か黒か，善か悪か，0 か 100 かなど，物事を二律背反なものとして思考する傾向である。大学生 330 名を対象に二文法的思考，認知的評価，情動知能の質問紙調査を実施し，分析した。二文法的思考に対する嗜好は，挑戦の認知的評価に有意な正の効果を示し，回避の認知的評価に負の効果を有することが明らかになった。一方で，二文法的思考の信念は，回避の評価と孤立したアプローチの対処戦略に重大な悪影響を及ぼすことも明らかになった。（pp. 42～46） 共著者：生田目光，上田寛子，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
23．女性の醜形恐怖心性尺度の作成	共	平成 27 年 3 月	日本応用心理学会誌『応用心理学研究』40 巻	本研究では，女性の醜形恐怖心性を測定する尺度を新たに作成し，信頼性・妥当性も併せて検討した。醜形恐怖心性とは，健常者における容姿に対する強いこだわりのことである。開発した尺度は，「容姿に対する評価懸念」と

				「容姿に対する関心集中」の２つの下位因子からなる計９項目からなる。開発した尺度は，十分な信頼性，及び収束的妥当性，弁別的妥当性，併存的妥当性が確認され，健常者における容姿に対する強いこだわりを測定するための適切な尺度を作成した。（pp. 186～193） 共著者：大村美菜子，小島弥生，中田洋二郎，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
24. ホープとコーピングの柔軟性との関連	共	平成 27 年 3 月	日本産業カウンセリング学会誌『産業カウンセリング研究』第 16 巻	本研究では，ホープとコーピングの柔軟性との関連性を検討した。大学生 389 名を対象に質問紙調査を実施した。最初に精神的につらい状況に遭遇した時，その場を乗り越え，落ち着くために，普段からどのように考え，どのように行動するようにしているかと質問し，TAC-24 への回答を求めた（プレ条件）。続いて，そのようなことを行っても，望んでいるような結果が得られなかった時，どのように考えたり，行動したりするかと質問し，再度 TAC-24 への回答を求めた（ポスト条件）。その結果，ホープ傾向が高い者は，ホープ傾向が低い者に比べ，コーピング方略の情報収集，肯定的解釈，計画立案の使用頻度が高いことが示された。（pp. 10～17） 共著者：井古田大介，井古田希美，奥野誠一，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
25. ホープと問題解決能力との関連	共	平成 27 年 3 月	山形大学教職研究総合センター『山形大学心理教育相談室紀要』13 巻	本研究では，ホープと問題解決能力，well-being との関連を明らかにすることを目的とした。大学生 401 名を対象に，ホープ尺度，問題解決能力尺度，人生の満足度尺度を実施した結果，ホープ傾向が高い者は，ホープ傾向が低い者に比べて，問題解決能力の下位尺度である「問題解決行動の自信」，「問題解決行動の積極性」，「情動の統制感」が高いことが示された。また，パス解析の結果から，ホープは問題解決能力と well-being に直接影響を与えることが明らかになった（pp. 1～6）。 共著者：井古田大介，井古田希美，奥野誠一，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
26. Beautiful Skin Hides All Faults ― Effects of Body Satisfaction on Self-esteem and Shyness in Japanese Female	共	平成 27 年 4 月	International Journal of Psychology and	本研究は，女子学生の身体部位の認識から自己肯定感とシャイネスの影響を検討した。検討に当たっては，女子学

Youths			Counseling, vol.7	生の身体の各部位の満足が，自己肯定感を通してシャイネスに影響を与えると仮説を立て，パス分析を用いて検証を行った。その結果，唯一「肌」に対する満足が自己肯定感とシャイネスへの影響を示した。とりわけ「肌」の満足が女子大生の自己肯定感とシャイネスに重要な影響を与えていることが明らかになった。（pp. 47～53） 共著者：大村美菜子，小島弥生，中田洋二郎，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
27. メディアの利用と痩身理想の内在化との関係	共	平成 27 年 9 月	日本教育心理学会誌『教育心理学研究』第 63 巻	本研究では，体型に関するメディアの情報を受けた個人が，その影響から痩身理想をどの程度内在化しているのかを評価する尺度を開発し，大学生の痩身理想の内在化とメディア利用頻度との関連性について検討した。男女学生 998 名を対象に開発した尺度とネット，テレビ，雑誌といったメディア利用頻度との関連性を調べた結果，男性より女性の方がメディアの情報を受けて痩身理想を内在化し，メディアの情報を重要だと考え，外見に関というするプレッシャーを感じていることが明らかになった。（pp. 309～322） 共著者：浦上涼子，小島弥生，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
28. A Comparison of Manifestations and Impact of Reassurance Seeking Among Japanese Individuals with OCD and Depression	共	平成 27 年 9 月	Behavioural and Cognitive Psychotherapy, vol 43	脅威と不安に対する一般的な反応の 1 つは，信頼できる人から安心感を求めることである。ReSQ は，安心感を求めている行動のいくつかの重要な側面を測定するためのものである。本研究では，ReSQ スコアを，強迫神経症を有する集団，うつ病を有する集団，健常者の集団の 3 つの集団間で，安心感を求めるパターンと結果を比較した。その結果，強迫神経症のグループは，安心感をより強く求め，うつ病や健常者のグループよりも自信を持つ傾向があることがわかった。また，安心感が得られなかった場合には，安心感を求める傾向が強くなったことが明らかになった。なお，本研究は，強迫神経症とうつ病の患者の間の安心感の差を定量的に解明した最初の研究である。(pp. 623～634) 共著者：小堀修，沢宮容子，伊豫雅臣，清水栄司（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）

29．看護師特有のビリーフ尺度の作成	共	平成 27 年 12 月	日本ヒューマンケア学会誌『ヒューマンケア研究』第 16 巻	本研究では，看護師の職業文化から生じた，看護師特有の看護観，患者・家族観をビリーフの概念でとらえ，看護師特有のビリーフ内容と看護師特有のビリーフの強さを測定する尺度を作成した。本研究は，２つの調査で構成される。まず予備調査では，看護師特有のビリーフを測定する尺度の項目選定及び作成された尺度に対する因子構造を検討した。次に本調査では，予備調査の結果から看護師特有のビリーフ尺度の因子構造の追加・修正を行い，さらに信頼性と併存的妥当性を検討した。（pp. 30～39） 共著者：清野純子，石川利江，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
30．動機づけ面接のスキルを評価する尺度	共	平成 28 年 3 月	日本応用心理学会誌『応用心理学研究』第 41 巻	本稿では，今後日本で動機づけ面接を用いた臨床研究のデザインを行う上での参考資料とするための文献レビューを行った。具体的には，第一に，既存尺度の種類と特徴（開発経緯，想定される評価者，評価対象，評価手続き，日本語邦訳版の有無），第二に，各尺度の利用頻度，第三に，各尺度の利用領域，この三点に着目して，これまで開発されてきた動機づけ面接の評価尺度についてレビューを行った。(pp. 240～248) 共著者：大坪陽子，沢宮容子，原井宏明（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
31．フォロー（追随）とリード（先導）のバランスをどうとるか	単	平成 28 年 5 月	金剛出版『臨床心理学』第 16 巻	援助を必要としている人に対し，どのように手をさしのべるか，これについては様々な道筋がある。その一つの道筋が「フォロー（追随）」と「リード（先導）」の間でバランスをとることである。これはつまり，CBT，REBT ともよく馴染む動機づけ面接の導入である。本稿では，どのように CBT，REBT と動機づけ面接を統合していったら良いかについて先行研究をレビューしながら検討した。特に，心理教育を実施する際に，動機づけ面接の考え方からクライエントの許可を得たのちに情報提供を行うことを，すぐにでも導入可能な例として取り上げた。また，動機づけ面接が実際に行えるようになるためには，集団ワークショップ参加と個人レッスンも必要である。（pp. 275～278）

32. 認知行動療法を用いたメンタルサポート	単	平成 28 年 6 月	更年期と加齢のヘルスケア学会誌『更年期と加齢のヘルスケア』第 15 巻	認知行動療法は，人間の認知，行動，情動，生理の各機能は相互に影響し合いながら，同時に環境の影響も受けているという考え方を前提にしている。うつ病はもちろんのこと，不安障害やストレス関連障害など，精神疾患への適用をはじめ，精神疾患以外でも，日常のストレスマネジメント，教育，司法・矯正，産業場面の問題など，認知行動療法の適用範囲は広がりを見せている。カウンセラーは，この考え方に立ち，クライエントの「認知，行動，情動，生理」という 4 つの機能および環境に働きかけ，クライエントと協力しながら，各機能の変容を促していくのである。本稿では，認知行動療法を用いたメンタルサポートについて検討した。認知行動療法の理論的背景とモデルから，療法としての特徴について先行研究を引用しながらレビューを行った。（pp. 134～137）
33. Personality Traits Associated with Body Shape	共	平成 28 年 10 月	International Journal of Affective Engineering, vol.15	本研究では，身体の痩身に関連する性格特性を検討した。意味差判別法（SD 法）を用いるに当たって，事前調査で 12 対の形容詞を選定した。例えば，「清潔-不清潔」，「身だしなみが良い-悪い」などである。その後，大学生 91 名を対象に意味差判別法（SD 法）を用いて，身体に対する形状について評価させた。その結果，「清潔-不清潔」，「身だしなみが良い-悪い」は，他の形容詞に比べて，ポジティブに評価する傾向が高いことが示唆された。（pp. 161～166） 共著者：生田目光，斎藤美穂，<u>沢宮容子</u>（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
34. 抑うつ傾向の高い者のホープの検討	共	平成 29 年 3 月	山形大学教職研究総合センター『山形大学心理教育相談室紀要』15 巻	本研究では，ホープの概念に注目し，健常者と比較することで抑うつ者のホープの特徴を検討した。具体的には，抑うつ者（14 人）と健常者（163 人）を対象に，ホープ尺度，対処方略尺度，および抑うつ尺度を実施したところ次のような結果が得られた。健常者に比べて抑うつ者は，ホープ目標志向的計画と目標志向的思考が低いことが明らかになった。また，健常者に比べて抑うつ者は，情報収集，肯定的解釈，気晴らし，計画立案などの使用頻度が低いことが示された。（pp. 1～6） 共著者：井古田大介，井古田希美，奥野誠一，西松能子，<u>沢宮容子</u>（共同執

				筆につき担当箇所抽出不可能）
35. ポジティブボディイメージを測定するBAS-2の日本語版作成	共	平成29年4月	日本心理学会誌『心理学研究』第88巻	本稿では，ポジティブボディイメージ（BAS-2）の日本語版を作成し，その因子構造と内的整合性を検討した。また，構成概念妥当性を検証するために，体型不満足感，身体醜形懸念，メディアの内在化，食行動異常，自尊心，ウェルビーイングとの関連を検討した。さらに，食行動異常，自尊心，ウェルビーイングにおいて，日本語版BAS-2が身体不満足感を上回る説明力を持つかどうかを検証し，妥当性を検討した。調査を通じて，日本語版は原尺度と同様に一因子10項目で構成され，男女両方において同一の内容を測定できていることが明らかになった。（pp.358～365） 共著者：生田目光，宇野カオリ，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
36. ポジティブ心理学とは	共	平成29年7月	精神科編集委員会誌『精神科』第31巻	ポジティブ心理学は，人が生まれて死ぬまで，「いかに良い方向に向かい，良い人生を送るか」という課題について，科学的に研究する学問である。人生に関する良いことは，悪いことと等しく正真正銘の事実である。また，人が持つ強みや長所は，弱みや欠点と同様に重要である。ポジティブ心理学はそのいずれにも着目することを前提とする考え方である。具体的には，人間のポジティブな主観的経験や，ポジティブな個人特性や，それらの発達を促進する制度や実践的手法について扱う。本稿では，ポジティブ心理学の長い過去と短い歴史，誕生の背景，ポジティブ心理学の独創性，ポジティブ心理学への批判のテーマについてレビューした。（pp.50～54） 共著者：沢宮容子，宇野カオリ（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
37.イラショナル・ビリーフが情動知能の成長感に及ぼす影響	共	平成30年1月	日本人生哲学感情心理学会誌『REBT研究』第4巻	本研究では，イラショナル・ビリーフが情動知能の成長感に及ぼす影響について検討した。具体的には，個人特性としてのイラショナル・ビリーフを用いて，個人特性と認知的評価がストレス対処を導き，そのストレス対処が情動知能の成長感に影響を及ぼすという仮説を検証した。なお，ストレス経験として大学入試に着目し，大学生330名を対象に質問紙調査を実施して，共分散構造分析を行った。その結果，個

				人特性によってストレス対処や情動知能の成長感に与える影響が異なり，それぞれの特性にあった支援が必要であることが示唆された。（pp. 3～12） 共著者：生田目光，上田寛子，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
38. イラショナル・ビリーフが自己受容に及ぼす影響	共	平成30年1月	日本人生哲学感情心理学会誌『REBT研究』第4巻	本研究では，イラショナル・ビリーフの各側面が自己受容の各側面に対しどのような影響を与えるかを検討するため，大学生189人を対象に日本語版イラショナル・ビリーフテストと自己受容測定尺度を実施した。重回帰分析の結果，外的無力感と内的無力感，問題回避の身体的受容に対する負の影響，外的無力感と問題回避の精神的自己受容に対する負の影響などが明らかになった。このことから，イラショナル・ビリーフの各側面と自己受容の各側面には，異なる関連が示され，個々に検討する必要が示された。（pp. 13-20） 共著者：井古田大介，井古田希美，奥野誠一，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
39. 認知行動療法は「心理療法の統合」という視点からどう見えるのか	単	平成30年1月	金剛出版『臨床心理学』第18巻	心理療法の統合とは，心理療法の効率や効果，適用性を高めるために，学派の壁を超えて，より良い療法を模索する試みのことである。「統合的心理療法」が完成した一つの心理療法を指すのに対し，より良い方向性を目指す過程や姿勢を目指すのが「心理療法の統合」である。本稿では，認知行動療法は「心理療法の統合」という視点からどう見えるのかについて検討した。具体的には，心理療法の統合の様々な形態についてレビューした上で，逆に心理療法の統合という視点から認知行動療法を検討した。（pp. 77～79）
40. 完全主義は心理的援助へのアクセスを妨げるか	共	平成30年1月	日本認知療法学会誌『認知療法研究』第11巻	本研究では，心理的援助へのアクセスを促進もしくは阻害する心理的要因について検証した。特に，アスリートがどのような資源から心理的援助を求めようとするのか，そして，抑うつ，スティグマ，心理的援助に対する態度を統制した上でも完全主義パーソナリティが援助を求めることを妨げるのかを検証した。その結果，大学生アスリートは感情的な問題を抱えた時に専門家よりも家族や友人に援助を求めようとすること，ネガティブ完全主義は，パフォーマンスの悩みを抱えた時にコー

				チやチームメイトに援助を求めることを妨げることなどが明らかになった。（pp. 23～31） 共著者：小堀修，吉永尚紀，沢宮容子，（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
41. 体型に関わる損得意識と痩身願望	共	平成 30 年 1 月	日本応用心理学会誌『応用心理学研究』第 43 巻	先行研究において「体型に関わる損得意識」が痩身願望に至るメカニズムは男性と女性で異なる可能性が示唆されているが，いずれの研究も男性と女性を別々に検討しており，単純に比較することが困難である。そこで本研究では，痩身願望を支える要因としての「体型に関わる損得意識」，つまり痩身のメリット感及び現体型のデメリット感について，男女青年を比較できる形で検討した。（pp. 1～9） 共著者：小島弥生，浦上涼子，沢宮容子，（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
42. 同性愛者・両性愛者の抑うつ・不安を高める媒介モデルの検証	共	平成 30 年 10 月	日本心理学会誌『心理学研究』第 89 巻	本研究の目的は，反応スタイルや対人関係，メンタルヘルスについて異性愛者との比較から LGB の傾向を明らかにするとともに，性的指向が対人関係や反応スタイルを介してメンタルヘルスに影響を与える仮説モデルについて検討することであった。大学生・大学院生 1330 名（LGB205 名，異性愛者 1125 名）を対象に質問紙調査を行った結果，LGB は異性愛者に比べ，ネガティブな反省を頻繁に行い，対人ストレスが多く，ソーシャルサポートが少ないことが示された。さらに，性的指向は，反芻を介して抑うつや不安に影響をおよぼすことが示された。（pp. 356～366） 共著者：佐藤洋輔，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
43. パッション尺度日本語版の作成および信頼性・妥当性の検討	共	平成 30 年 12 月	日本心理学会誌『心理学研究』第 89 巻	パッションは，特定の活動などに対して向けられる強い意向である。本研究では，Passion Scale の日本語版を作成し，パッション尺度日本語版の信頼性と妥当性の検討を行った。基準関連妥当性の検討のため，パッション尺度日本語版に加え，フロー，集中，不安，恥，抑うつ，ウェルビーイング，ポジティブおよびネガティブな感情を測定した。分析の結果，先行研究と同様に調和性パッションと強迫性パッションの 2 因子構造が認められ，十分な信頼性と妥当性を備えていることが示された。（pp. 490～499）

				共著者：久保尊洋，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
44. 適応的調和食行動尺度(IES-2)の日本語版作成	共	令和元年8月	日本心理臨床学会誌『心理臨床学研究』第37巻	本研究は，適応的調和食行動を測定するIES-2の日本語版を作成し，信頼性・妥当性を検討すること，およびIES-2日本語版が摂食障害傾向を超える予測力を持つかを検証することを目的とした。大学生675名を対象に行った質問紙調査の回答を分析した結果，IES-2日本語版は十分な信頼性・妥当性を持つとともに，従来注目されてきた摂食障害傾向を超えて，ウェルビーイングを予測することができる有効な尺度であることが示唆された。（pp.238～248） 共著者：生田目光，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
45. Development and validation of a Japanese version of the Emotion Regulation Questionnaire for Children and Adolescents	共	令和2年1月	Neuropsychiatric Disease and Treatment, vol.16	本研究の目的は，Emotion Regulation Questionnaire for Children and Adolescents（ERQ-CA）の日本語版を作成し，その信頼性と妥当性を検討することである。8～12歳の児童389名および12～18歳の青年1738名に対して調査を行った。また，4週間後に1300名の児童と青年を対象として，8-11歳，12-15歳，16-18歳という異なる年齢層における測定不変性の検証を行った。分析の結果，ERQ-CA日本語版は，良好な信頼性と妥当性を有していることが示された。（pp. 209～219） 共著者：生田目光，藤里紘子，伊藤正哉，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
46. 持続要因に着目した反すう研究の動向	共	令和2年2月	筑波大学『筑波大学心理学研究』第58巻	反芻はもともと抑うつのリスクファクターとして提唱されたもので，研究が進むにつれその不適応な側面に焦点が当てられた。近年，反芻の特性に加えて，その状態に着目する重要性に言及され，介入や研究手法に変化がみられている。本稿では，反芻が持続する要因について，4つの観点すなわち（1）制御理論，（2）メタ認知的信念，（3）気分状態，（4）注意資源と注意の範囲から文献のレビューを行い，今後の展望を述べる。（pp.83～92） 共著者：大井瞳，望月聡，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
47. イラショナル・ビリーフが心身の主観的健康感に及ぼす影響	共	令和2年3月	立正大学『立正大学臨床心理学研究』第18巻	本研究は，短期縦断的な方法を用いて，イラショナル・ビリーフ（iB）と対人ライフイベントとの交互作用が心身の主観的健康感に及ぼす影響を明らかに

				することを目的とした。その結果，「外的無力感」の iB 得点が高い者は，対人ポジティブライフイベントの経験頻度が多いほど「身体的不健康」がやや低い，「外的無力感」の iB 得点が低いものは，対人ポジティブライフイベントの経験頻度が多いほど「身体的不健康」がやや高い傾向が示された。（pp. 21～33） 共著者：井古田希美，井古田大介，奥野誠一，西松能子，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
48. The Breast Size Satisfaction Survey (BSSS): Breast size dissatisfaction and its antecedents and outcomes in women from 40 nations	共	令和 2 年 3 月	Body Image, vol,32	バストサイズ満足度調査は，女性のバストサイズに対する不満や体験を国際的な視点から評価するため行われた。40 カ国にわたる 18,541 名の女性を対象に調査を行った結果，全体の約 70%が自身のバストサイズに何らかの不満を持っていた。また，バストサイズに対する不満が大きいほど体重や外見への不満が大きく，心理的幸福が低いなど，バストサイズへの不満が女性の心理的・身体的幸福度と関連することが示唆された。（pp. 199～217） 共著者：Swami, V., Tran, U. S., Barron, D., Afhami, R., Aimé, A., Almenara, C. A., ...Sawamiya, Y... & Argyrides, M.（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
49. Psychometric properties of the Japanese version of the Body Appreciation Scale-2 for Children (BAS-2C)	共	令和 2 年 6 月	Body Image, vol.33	近年，ポジティブなボディイメージ研究への関心が高まっているにもかかわらず，子どもたちを対象にポジティブなボディイメージを探求した研究はほとんどない。本研究の目的は，Body Appreciation Scale for Children-2（BAS-2C）の日本語版の作成および信頼性・妥当性の検討である。243 名の子どもたちを対象に調査を行った結果，良好な信頼性が示された。また，BAS-2C 日本語版と身体に対する不満，自尊心，生活満足度の相関から十分な妥当性があることが示された。（pp. 7～12） 共著者：生田目光，八島禎宏，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
50. 浅い関係で用いられるスキルが行動活性化に与える影響	共	令和 2 年 11 月	日本応用心理学会誌『応用心理学研究』第 46 巻	本研究では，浅い関係で用いられるスキルが行動活性を媒介し，抑うつおよび不安に与える影響について検討した。大学生 466 名を対象に質問紙調査を行った結果，「楽しさ演出スキル」は，活性化を媒介して，抑うつおよび

				対人不安を低減し，「衝突回避スキル」は，活性化および回避を媒介して，抑うつおよび対人不安を低減するという影響過程が示された。一方で，「表面的同意スキル」に関しては活性化を媒介し，抑うつおよび対人不安が増加するという影響過程が示された。(pp. 139～148) 共著者：田中圭，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
51. Investigation of attachment orientation, and affect regulation	共	令和2年11月	Psychologia, vol.62	本研究の目的は，新しい図式的ツールである「距離的情動調節マッピング」（DARM）を用いて，大学生アスリートの情動調節戦略を検討することであった。96名の大学生アスリートを対象に分析を行った結果，安全な愛着志向を持つアスリートは，ストレスを和らげるために頼りにしている人との近接を求める傾向があること，大学生アスリートがストレスに対処するためにDARMが有用であることが示唆された。 （pp. 63～76） 共著者：小堀修，沢宮容子，吉永尚紀，Rowe, A. C., Wilkinson, L. L（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
52. 浅い関係で用いられるスキルが対人疲労感に及ぼす影響	共	令和3年3月	日本学校カウンセリング学会誌『学校カウンセリング研究』第21巻	本研究の目的は，大学生を対象に対人疲労感尺度を作成するとともに，浅い関係で用いられるスキルおよび従来のソーシャルスキルが対人疲労感にそれぞれどのような影響を及ぼしているのかを検討することである。その結果，尺度の信頼性・妥当性が確認され，「表面的同意スキル」と「主張性スキル」が対人疲労感の高さと関連し，「関係開始スキル」と「関係維持スキル」が対人疲労感の低さと関連していることが明らかとなった。（pp. 49～57） 共著者：田中圭，宮前淳子，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
53 パッションがスマートフォン依存，精神的健康，不眠傾向に与える影響	共	令和3年3月	日本学校心理学会誌『学校心理学研究』第20巻	本研究では，スマートフォン（以下スマホ）使用に対する調和性パッション（以下HP）と強迫性パッション（以下OP）がスマホ依存，精神的健康，不眠傾向に与える影響を明らかにすることを目的とした。その結果，HPとOPがそれぞれに与える影響が示され，適切なスマホ使用と問題のあるスマホ使用とを区別した効果的な心理教育的援助サービスを提供できる可能性が示唆された。（pp. 129～137）

				共著者：久保尊洋，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
54 青年期前期女子におけるボディ・アプリシエーション，身体認識，ダイエット行動の関係性	共	令和 3 年 3 月	日本応用心理学会誌『応用心理学研究』第 46 巻	本研究では，わが国の青年期前期女子のボディイメージの実態を把握した上で，青年期前期女子におけるボディ・アプリシエーションについて検討した。214 名を対象に質問紙調査を行った結果，理想とする BMI と現実の BMI のギャップが大きく，わが国の青年期前期女子は WHO 基準における低体重を理想としていることが示された。一方で，ボディ・アプリシエーションとダイエット行動との関連については，有意な相関関係は認められなかった。行動よりも認知に優先的に介入することで，ボディ・アプリシエーションをより効率的に高めることができると考えられる。（pp.264～270） 共著者：生田目光，鈴木公啓，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
55. LGB における性的指向と関連した体験：マイノリティ・ストレスに焦点を当てて	共	令和 3 年 4 月	日本心理臨床学会誌『心理臨床学研究』第 39 巻	本研究では，12 名の LGB 当事者の大学生および大学院生への半構造化面接によって LGB における性的指向と関連した体験について検討した。その結果，LGB はスティグマと関連した様々なプロキシマル・ストレッサーを体験している一方で，LGB コミュニティや LGB 文化へのコミットメントにより，肯定的な体験もしていることが示された。これらの体験内容は LGB としてのアイデンティティの受容度と関連し，その性的指向によって異なることが示唆された。（pp.26～37） 共著者：佐藤洋輔，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
56. 日本語版幸せへの恐れ尺度と日本語版幸せの壊れやすさ尺度の信頼性・妥当性の検討	共	令和 3 年 4 月	日本心理学会誌『心理学研究』第 92 巻	本研究では，日本語版幸せへの恐れ尺度と日本語版幸せの壊れやすさ尺度を作成し，信頼性・妥当性を検討した。因子構造，内的整合性，構成概念妥当性，増分妥当性，再検査信頼性の 5 つの観点から検討を行った結果，本研究のサンプルにおいて，日本語版幸せへの恐れ尺度と日本語版幸せの壊れやすさ尺度は十分な信頼性・妥当性を備えていることが示された。また，2 つの尺度は，生活満足度，抑うつ，不安，ストレスといった心理的要因に対して，BIS/BAS 以上の予測力をもつという新たな知見が得られた。（pp.31～39） 共著者：生田目光，猪原あゆみ，浅

				野良輔，五十嵐祐，塚本早織，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
57．対人問題の困難さと重要な他者に対する役割期待のずれ，精神状態との関連	共	令和3年7月	日本応用心理学会誌『応用心理学研究』第47巻	本研究では，日常場面で個人が感じる様々な対人問題の困難さを測定し，精神状態との関連について検討した（研究1）。さらに，重要な他者に対する役割期待のずれが対人問題の困難さおよび精神状態に及ぼす影響について検討した（研究2）。その結果，研究1では，様々な対人問題の困難さが精神状態と関連することが示され，パーソナリティや対人特性だけでなく，対人問題の困難さに着目することの必要性が示唆された。研究2では，役割期待のずれのうち，特に重要な他者の支援的行動に関する役割期待のずれが対人問題の困難さを高め，さらに抑うつを高めることが示された。（pp.12～24） 共著者：鈴木康之郎，能渡真澄，田中圭，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
58．パッションが自動思考を介して人生満足感と抑うつに与える影響	共	令和3年10月	日本ストレスマネジメント学会誌『ストレスマネジメント研究』第17巻	本研究では，パッションと自動思考との関連を明らかにするために，パッションが人生満足感及び抑うつに与える影響における自動思考の媒介効果を検討した。大学生248名に質問紙調査を行った結果，調和性パッションから肯定的自動思考を介して，人生満足感に正のパスと，抑うつに負のパスがみられた。また，強迫性パッションから，否定的自動思考を介して，抑うつに正のパスがみられた。（pp.89～96） 共著者：久保尊洋，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
59．心理臨床における動機づけ面接	共	令和3年10月	金剛出版『精神療法』第47巻	本稿では，Miller と Rollnick の「動機づけ面接に関する10の“not”」に即して，MI（動機づけ面接）の具体的な内容を解説した。MIは，変化についての会話であり，カウンセリングであり，コミュニケーションのスタイルであることから，集団ワークショップ参加と個人レッスンが欠かせない。机上学習だけではなく，実践によってスキルを磨くことが重要であることが示唆された。（pp.663～669） 共著者：沢宮容子，佐藤洋輔（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
60．Psychometric validation of the Japanese version of the Functionality Appreciation Scale	共	令和4年3月	Body Image, vol.40	機能的評価尺度（FAS）は，自分の身体とその能力に対する評価を測定する尺

(FAS)				度として広く採用されている。本研究では，FAS 日本語版の信頼性・妥当性を検証した。750 名の日本人を対象にオンライン上で行った質問紙調査の分析結果から，FAS 日本語版の十分な・妥当性と，ポジティブなボディイメージと健康的な食生活を向上させるための機能的評価の重要性が示唆された。 （pp. 116-123） 共著者：生田目光，山宮裕子，島井哲志，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
61. 教師における 3 種類のコンパッションとコーピング，バーンアウトとの関連	共	令和 4 年 4 月	日本心理臨床学会誌『心理臨床学研究』第 40 巻	本研究の目的は，教師のコンパッションと，コーピング，バーンアウトとの関連について検討することであった。小中学校に勤める教師 188 名を対象に質問紙調査を実施し，構造方程式モデリングによる分析を行った結果，「セルフ・コンパッション」と「他者からのコンパッション」が高いほど，適応的コーピングを用いやすく，バーンアウトを低減させることが示された。一方で，「他者へのコンパッション」はコーピングやバーンアウトにつながっていなかった。（pp. 40-50） 共著者：生田目光，滝本鈴，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
62. パーソナリティ障害傾向が対人目標および自己呈示に及ぼす影響―親密度の違いに着目して―	共	令和 4 年 2 月	筑波大学『筑波大学心理学研究』第 60 巻	本研究の目的は，境界性・自己愛性・演技性・回避性・依存性 PD 傾向における対人目標が自己呈示に及ぼす影響について，親密度の違いに着目して検討することであった。その結果，親しい友人に対しては、境界性 PD 属性はコミュニオンの自己呈示に正の影響を与え、自己愛性 PD 属性は主体性の自己呈示に正の影響を与えることが示され，知人に対しては、組織型 PD 属性と自己愛型 PD 属性が、対人関係上の目的に応じて自己呈示を促進したり抑制したりすることなどが示された。（pp. 65-76） 共著者：櫛引夏歩，望月聡，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
63. 児童のポジティブボディイメージを育成するプログラムの効果	共	令和 4 年 6 月	日本教育心理学会誌『教育心理学研究』第 70 巻	本研究の目的は，児童を対象にボディイメージの実態を調査し，ポジティブボディイメージを育成するプログラムを開発し，効果を検証することであった。まず，児童 232 名を対象として質問紙調査を行ったところ，ボディイメージの問題は児童期から生じているこ

				とが示された。次に，全3回の1次予防プログラムを開発し，児童161名を対象に学級単位で有効性を検討した結果，ポジティブボディイメージが高まり，その効果は3ヵ月間維持されることが示された。（pp.205-220） 共著者：生田目光，八島禎宏，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
64. 対人問題インベントリー短縮版の作成および信頼性・妥当性の検討	共	令和4年6月	日本心理学会誌『心理学研究』第93巻	本研究の目的は，対人問題インベントリー短縮版を作成し，信頼性および妥当性の検討を行うことであった。分析の結果，測定精度が十分に保たれた短縮版であることが示され，特に，対人問題を強く感じている者に対してより高い測定精度を有することが示唆された。また，十分な内的整合性および再検査信頼性も確認された。 （pp.150-160） 共著者：鈴木康之郎，田中圭，白砂佐和子，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
65. 動機づけ面接の中核的スキルはスマートフォン使用についてのチェンジトークを引き出すか	共	令和4年7月	日本認知・行動療法学会誌『認知行動療法研究』第48巻	本研究の目的は，動機づけ面接の中核的スキルはスマートフォン使用についてのチェンジトークを引き出すかどうかを明らかにすることであった。実験参加者50名に対し，スマートフォン使用の問題を標的行動にし，動機づけ面接の中核的スキルを用いるOARS条件と，非OARS条件を設定し，1回の面接で交互に条件を変えて介入を行うABABデザインで実験を行った。その結果，動機づけ面接の中核的スキルは，スマートフォン使用についてのチェンジトークを引き出すスキルであることが示唆された。（pp. 173-182） 共著者：久保尊洋，瀬在泉，佐藤洋輔，生田目光，原井宏明，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
66. Interethnic Influencing Factors on the Buttock Body Image in Women from Nigeria, Germany, USA and Japan	共	令和4年10月	International Journal of Environmental Research and Public Health, 19(20)	ボディイメージ研究において、文化間の要因に考慮した研究はほとんど見られない。本研究では、ドイツ、ナイジェリア、アメリカ、日本という４カ国の2163人（女性48%、男性52%）を対象にし、ボディイメージ、身体知覚等を検討した。その結果、Instagram、TikTok等の使用頻度と、女性自身の身体に対するネガティブな認知との間に、有意な相関があることなどが明らかになった。 共著者：Christoph Wallner, Svenja

				Kruber, Sulaiman Olanrewaju Adebayo, Olusola Ayandele, Hikari Namatame, Tosin Tunrayo Olonisakin, Peter O, Olapegba, Yoko Sawamiya, Tomohiro Suzuki, Yuko Yamamiya, Maximilian Johannes, Wagner, Marius Drysch, Marcus Lehnhardt, & Björn Behr（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
67. 人はどのような自分を目指すのか?: 理想自己・義務自己・望ましくない自己の質的検討	共	令和5年2月	筑波大学『筑波大学心理学研究』第61巻	本研究の目的は，①国内の現代青年が有する望ましくない自己の内容を検討すること，②3つの自己指針を取り上げ，その内容から概念的関係を検討することであった。関東圏の大学に在学する大学生および大学院生 198名を対象に、調査を行い、質的検討を行ったところ、理想自己，義務自己，望ましくない自己のいずれにおいても，その内容によって自己不一致の大きさの程度が異なることが示された。（pp. 111-121） 共著者：能渡綾菜、能渡真澄、望月聡、沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
68. LGB アイデンティティ尺度（LGBIS）日本語版の作成	共	令和5年4月	日本心理学会誌『心理学研究』第94巻	本研究の目的は、Lesbian、Gay、Bisexual Identity Scale（LGBIS）の日本語版を開発することであった。703人の日本人LGB当事者を対象に､LGBIS）翻訳された日本語版の信頼性と妥当性を検討した。その結果、LGBIS 日本語版は十分な内的整合性と再検査信頼性を有しており，基準関連妥当性もアイデンティティに関わる複数の指標との間でおおむね予測通りの関連を示した。さらに，精神的健康との関連についても，先行研究の知見を支持する結果が得られ、本研究によって作成された LGBIS 日本語版は十分な信頼性・妥当性を備えていると判断された。（pp. 54-64） 共著者：佐藤洋輔、宇野カオリ、沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
（その他） （平成20年以降） 1. 認知行動療法事典	共	平成22年12月	日本評論社（512ページ）	本書は，世界各国の研究者・実践家がCBT（認知行動療法）について広汎かつ包括的に執筆し，これまでのCBTの到達点を示すとともに，今後の課題を提示している。CBTの包括的な理解を助ける「読む事典」とも言うべき内容とな

				っている。担当翻訳箇所では，CBPT（認知行動遊戯療法）について，従来の遊戯療法との違いや子どもを対象に認知療法を行う場合の留意点，CBPT の導入および CBPT の 4 段階について解説するともに，環境や材料，介入についても説明した。 担当箇所：「遊戯療法」（pp. 456～458） 編著者：A. フリーマン・S. H. フェルゴワーズ・A. M. ネズ・ C. M. ネズ・M. A. ライネッケ【編著】内山喜久雄・大野裕・久保木富房・坂野雄二・ 沢宮容子・富家直明【監訳】
2. 臨床実践を導く認知行動療法の 10 の理論―「ベックの認知療法」から「ACT」・「マインドフルネス」まで―	共	平成 24 年 11 月	星和書店（522 ページ）	本書は，理論構造が臨床実践をどのように導き豊かにするか，認知行動療法の主要な 10 のモデルについて解説している。「精神障害の哲学，心理学，原因，および治療」から始まり，「理論的情動行動療法」「アクセプタンス＆コミットメントセラピー」「行動活性化療法」「弁証法的行動療法」「認知分析療法」「ポジティブ心理学とポジティブセラピー」「マインドフルネス認知療法」「感情焦点化／対人的認知療法」等、全 11 章で構成される。 編著者：N. カザンツィス・M. A. ライナック・A. フリーマン【著】，小堀修・沢宮容子・勝倉りえこ・ 佐藤美奈子【訳】
3. 生涯発達の中のカウンセリングⅡ: 子どもと学校を援助するカウンセリング	共	平成 25 年 2 月	サイエンス社（308 ページ）	本書は，大学や研修におけるカウンセリングの教科書として使用することを目的とし，生涯発達カウンセリングを体系的に解説した。特に，学校におけるカウンセリングを様々な側面から説明し，議論しているところに特色がある。担当箇所では，対人関係ゲーム・プログラムというカウンセリング技法について解説した。同技法は，教師が学級集団における人間関係を改善し，学級づくりを促進させるためのものである。 担当箇所：コラム②「学校づくりを促進する対人関係ゲーム・プログラム」（pp. 108～109） 編著者：石隈利紀・藤生英行・田中輝美
4. 臨床心理学　必携保存版 臨床心理学実践ガイド	共	平成 29 年 7 月	金剛出版（160 ページ）	本書は，臨床心理学の学問と実践の発展を一望するキーワード集である。初学者が臨床心理学の世界に触れるためのガイドブックとして，また臨床実践の基本を確認し，知識の幅を広げよ

				うとする臨床家のために作られた一冊である。担当箇所では，科学と実践が結合した流れに触れ，心理学全般の知識と実証的な研究方法の学習と臨床実践の両方を行うことで，科学性と実践性の両方を獲得する必要性について解説した。 担当箇所：「科学者―実践家モデル」（pp. 540～541） 編著者：岩壁茂，「臨床心理学」編集委員会
5. 人を育む愛着と感情の力――AEDP による感情変容の理論と実践――	共	平成 29 年 11 月	福村出版（480 ページ）	本書は，AEDP（加速化体験力動療法）の包括的なテキストである。第１部の「理論的基盤」では，コア感情の構成概念、愛着理論の研究との関わり，そして孤独から生み出される病理などから感情の変容モデルについて解説し，第 2 部の「ツールと題材」では，３つの表象図式やコア感情体験，ヒーリング感情を取り上げてモデルの運用を説明し，第３部の「介入方略」では，コア感情体験や開かれた関係性を促進し，防衛や不快な抑制感情の影響を最小限に抑える様々な方法を示している。 編著者：D. フォーシャ【著】岩壁茂・花川ゆう子・福島哲夫・沢宮容子・妙木浩之 【監訳】（共訳につき担当箇所抽出不可能）
6. ポジティブ精神医学	共	平成 30 年 7 月	金剛出版（395 ページ）	本書では，ポジティブメンタルヘルスがどのように精神医学の実践，教育，研究の中心的要素となり得るのかを，客観的に測定可能な研究結果から裏付け，定義や介入方法などの視点から考察した一冊である。担当箇所では，児童精神医学の訓練の大部分は精神疾患に焦点を当てたものであることを指摘し，ウェルネスと健康増進を児童精神科ケアに取り込む必要性について解説した。 担当箇所：第 14 章「ポジティブ児童精神医学」（pp. 317～337） 編著者：D. ジェステ・P. バートン【著】大野裕・三村將【監訳】
7. 質的心理学辞典	共	平成 30 年 11 月	新曜社（419 ページ）	本書は，質的研究の「いま」を概観し理解するための 1098 項目を精選し，基本的な概念から注目の研究テーマや方法論，知っておきたい人名まで簡潔かつ明快に解説した一冊である。担当箇所では３つの用語を担当，「公認心理師」では名称独占や 4 つの業務につい

				て，「心理療法」ではその目的，理論や技法について，「CBT」では認知・行動・情動・生理の４つの機能に働きかけ，自助の方法を獲得させることなどについて解説した。 担当箇所：「公認心理師」(pp.107)「心理療法」(pp.168)「認知行動療法：CBT」(pp.238～239) 編著者：能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦
8. 公認心理師・臨床心理士の実践知を看護に活かす！ナースが使える臨床心理の知識・技法(第９回)動機づけ面接 (Motivational Interviewing : MI)	共	平成30年11月	学研メディカル秀潤社『月刊ナーシング』第38巻	本稿では，動機づけ面接（以下MI）について，両価性の状態を理解し丁寧に話を聞いたり，開かれた質問，是認，聞き返し（確認），要約のスキルを使って会話を続けたりすることが，行動変容支援の第一歩となるということを解説した。また，臨床の場で会話の多い介護職にMIが役立つということについて，事例を紹介しながら解説した。（pp.114～117） 共著者：瀬在泉，沢宮容子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能）
9. 認知行動療法事典	共	令和元年8月	丸善出版（798ページ）	本書は，広範な治療法をもつ認知行動療法に関する全329項目から構成された事典であり，①基礎理論，②基礎研究，③認知行動療法の適用範囲，④アセスメント技法，⑤介入技法から公認心理師における主要5分野の解説までを網羅している。担当箇所では，A. エリスによって創始されたREBTを取り上げ， ABCモデルを踏まえている点，イラショナルビリーフに着目する点，合理的かつ哲学的なアプローチである点などの特長について解説した。 担当箇所：第5章「Rational Emotive Behavior Therapy (REBT)」（pp.290～291） 編著者：日本認知・行動療法学会
10. 心理療法統合ハンドブック	共	令和3年4月	誠信書房（256ページ）	本書は，日本におけるこれからの心理療法の統合のあり方を示すものである。有効性の確立された6つの統合療法や，臨床家育成のトレーニングにも言及し，重要な最新理論もトピックスにて提示している。担当箇所では，数多ある心理療法は，いずれも共通要因で説明可能であるとする主張，ドードー鳥評定について解説した。この主張を肯定する立場と否定する立場の両方の論点を説明し，今日の心理療法の分析について解説している。

				担当箇所:TOPICS2「ドードー鳥評定」（pp.36～37） 編著者：日本心理療法統合学会・杉原保史・福島哲夫
11.応用心理学ハンドブック	共	令和4年9月	福村出版 （858ページ）	本書は、中心的テーマとして16の領域・分野【研究方法／認知／感情・情動／教育／発達／パーソナリティ／臨床／福祉／健康／看護・医療／犯罪／社会・文化／産業／交通／災害／スポーツ】からホットなトピックを取り上げ（1章20トピック）、今どのような研究が各分野でなされているのか、関連する研究の歴史的背景、最新の動向、今後の課題と展望について解説した応用心理学研究の一大リファレンスである。臨床心理学領域である第7章「臨床と応用心理学」の編集にあたるとともに、Topic 9「動機づけ面接」を執筆した。（pp.336～337） 共著者：沢宮容子、大坪陽子（共同執筆につき担当箇所抽出不可能） 企画：日本応用心理学会、編集：応用心理学ハンドブック編集委員会
12.心理臨床学中事典	共	令和4年12月	遠見書房 （639ページ）	本書は，臨床心理学に関する全630項目から構成された事典である。臨床心理学は100年を超える歴史を有しており，社会構造の変化，基礎心理学、精神医学、基礎医学等の学際領域の発展により日々更新をし続ける学問領域である。本書は、臨床心理学の実践や研究を助ける実用的な事典となっている。担当箇所では「カウンセリング」および「カウンセラー」について解説した。 担当箇所：「カウンセラー」（pp.51～52）、「カウンセリング」（pp.52～53）。 監修：野島一彦